

研究を通しての成果と課題

1 成果

(1) 評価規準を生かしたテストやワークシートによる学習内容の定着

指導の中に評価規準を生かしたワークシートを用いて学習内容を具体的に示したり、小テストで形成的な評価を行ったりしたことによって、学習内容がおおむね定着している状況が確認できた。

(2) 言語活動の工夫による主体的な学びや古典に親しむ態度の形成

学習の目標や内容を明確にしたうえで、目標を達成できるように言語活動を工夫して指導に取り入れたことにより、生徒の主体的な学びや古典に親しむ態度が形成された。

(3) 言語活動や評価規準の活用による指導の改善

「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各言語活動は、国語科の授業の中で日常的に行われている。しかし、必ずしも意図的、計画的な指導の機会として指導計画に位置付けられているとは限らない。本研究では、指導目標や内容を明確にするとともに、古典に親しむ態度を養うために言語活動を工夫して指導計画に位置付けた。また、評価規準を生かして指導目標の達成状況の評価し、さらに評価を指導の改善に生かすように工夫した。これらによって、従来ありがちだった講義形式の指導の改善がなされた。

なお、本研究は古典に関する指導であるので、「読むこと」を中心に評価規準を設定したが、「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」を中心とした言語活動においても、その活動がどのような力をつけるためのものか、その活動に関する評価規準をどのように設定するか、ということを確認しておくことが肝要である。

(4) 自己評価のフィードバックによる主体的な学びの形成

生徒の自己評価の結果を教師が把握して指導の改善に生かすだけでなく、生徒に助言や励ましとしてフィードバックすることによって、生徒自身の学習意欲を高めることができた。

2 課題

(1) 指導と評価の方法、場面、時期の工夫

指導の改善を図るとともに、評価の信頼性を高めるために、評価の方法、場面、時期についても常に工夫していく余地はまだある。

(2) 評価規準の共通理解

学校および教科としての指導目標等を、生徒や保護者に説明するとともに、評価の信頼性、妥当性を高めるためには、評価規準の設定に際して、教科担当者間で共通理解を図ることが大切である。